

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第127集

毛越寺跡発掘調査報告書

毛越寺本堂改築工事関連発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

毛越寺跡発掘調査報告書

毛越寺本堂改築工事関連発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられている責務であります。また、私たちはこの文化遺産に学び、それを活用し新たな文化を創造していかなければなりません。

岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来埋蔵文化財保護の立場に立って、止むを得ず開発によって破壊される遺跡について、県教育委員会の指導と調整のもとに発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、西磐井郡平泉町に所在する毛越寺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査は宗教法人毛越寺の本堂改築工事に関連して昭和61・62年度に実施したもので南大門跡の西側地域から石敷遺構が発見されました。毛越寺跡の築垣外側にも石が敷設されていたことは注目されるところであります。

この報告書が広く活用され、斯学の発展と埋蔵文化財の一助となれば幸いと思います。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました宗教法人毛越寺、平泉町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年4月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村直

例　　言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町大字大沢58地内に所在する天台宗別格本山毛越寺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2. 本遺跡の調査は、毛越寺本堂改築工事に伴う事前の緊急発掘調査である。宗教法人毛越寺と県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3. 毛越寺跡の岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は次のとおりである。

　登録台帳番号………N E 76—1040　　遺跡略号………MT 86・MT 87

4. 野外調査は、第1次調査が昭和61年4月8日～5月31日、第2次調査が昭和62年4月7日～5月31日に実施した。室内整理は、昭和61年11月1日～12月27日および昭和62年11月1日～12月27日で行った。

5. 発掘調査面積は、第1次調査が700m²、第2次調査が800m²である。

6. 野外調査と室内整理担当者は次のとおりである。

　第1次調査……菊池利和、高橋義介　　室内整理……高橋義介

　第2次調査……小田野哲憲、高橋義介　　室内整理……高橋義介

7. 検出した遺構は次のとおりである。

　石敷遺構（平安）　　溝跡……1条　　冰室跡（近代）……1基

8. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

　I 調査に至る経過……………昆野　靖

　II 遺跡の位置と環境……………菊池利和、高橋義介

　III 調査の経過と方法……………高橋義介

　IV 検出された遺構と遺物……………高橋義介

　V まとめ……………高橋義介

9. 石質鑑定は佐藤地質工学研究所に依頼した。

10. 野外調査および室内整理では次の機関の御協力と御教示を賜った。

　宗教法人毛越寺、平泉町教育委員会

11. 野外調査にあたっては、小野寺時男氏をはじめ地元の方々の協力を得た。

12. 発掘調査によって得られた遺物および資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

例　言

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	3
1. 遺跡の位置.....	3
2. 地形と地質.....	3
3. 基本層序.....	4
4. 周辺の遺跡.....	4
III 調査の経過と方法.....	9
1. 調査の経過.....	9
2. 調査の方法と室内整理.....	10
IV 検出された遺構と遺物.....	12
1. 水室跡.....	12
2. 溝跡.....	13
3. 石敷遺構.....	14
4. 出土遺物.....	15
V まとめ.....	18

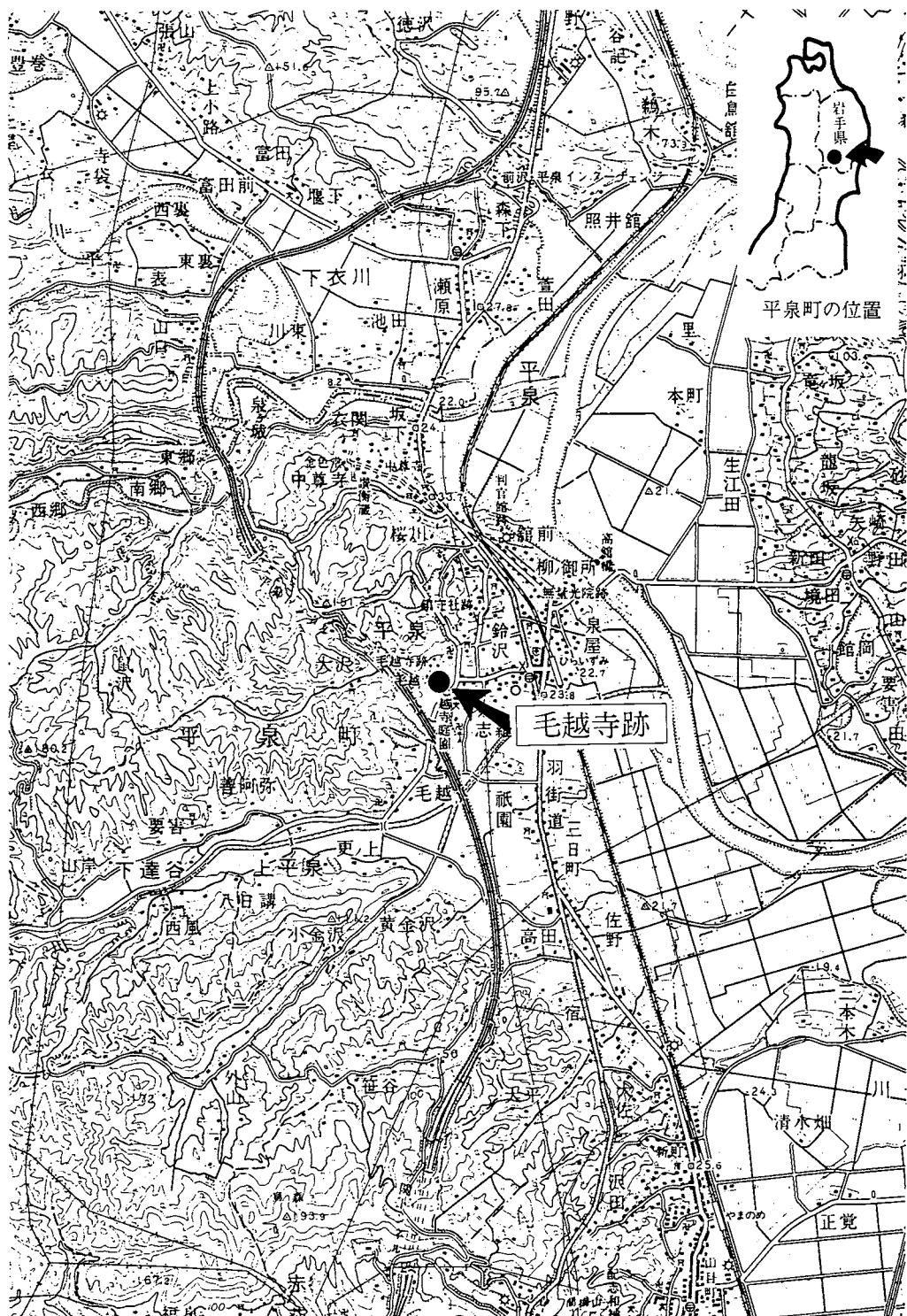
図版目次

第1図 遺跡周辺の地形図.....	2
第2図 地形分類図.....	5
第3図 周辺の遺跡.....	6
第4図 土層断面図.....	8
第5図 調査区画と遺構配置図.....	11
第6図 水室跡.....	12
第7図 溝跡.....	13
第8図 出土遺物(1).....	16
第9図 出土遺物(2).....	17
第10図 石敷遺構(1).....	19
第11図 石敷遺構(2).....	21

第12図 石敷遺構(3).....	23
第13図 石敷遺構(4).....	25
第14図 石敷遺構(5).....	27
第15図 石敷遺構(6).....	29
第16図 石敷遺構(7).....	31
第17図 石敷遺構(8).....	33
第18図 石敷遺構(9).....	35
第19図 石敷遺構(10).....	37

写真図版目次

写真図版1 調査前近景(第1次調査).....	41
写真図版2 石敷遺構(第1次調査).....	42
写真図版3 石敷遺構(第1次調査).....	43
写真図版4 石敷遺構(第1次調査).....	44
写真図版5 溝跡(第1次調査).....	45
写真図版6 水室跡(第1次調査).....	46
写真図版7 盛土状況・作業風景.....	47
写真図版8 調査前近景(第2次調査).....	48
写真図版9 石敷遺構(第2次調査).....	49
写真図版10 石敷遺構(第2次調査).....	50
写真図版11 石敷遺構(第2次調査).....	51
写真図版12 土層断面・写真測量風景(第2次調査).....	52
写真図版13 出土遺物(1).....	53
写真図版14 出土遺物(2).....	54



遺跡の位置図

地形図 1:50,000 水沢・一関

I 調査に至る経過

天台宗別格本山毛越寺の本堂等改築事業は昭和60年に基本設計され、昭和64年に竣工の予定である。

これに関わる国指定特別史跡・特別名勝である毛越寺跡の発掘調査は、毛越寺、平泉町教育委員会、岩手県教育委員会を経て文化庁へ現状変更の申請がなされ、事前調査の指示をうけて実施されることになったものである。この間の経過の概要は、以下のとおりである。

昭和60年9月15日付け 毛越寺から文化庁長官あて

毛越寺跡の現状変更申請書の提出

昭和60年9月19日付け 平泉町教育長から岩手県教育長あて

同進達

昭和60年9月23日付け 岩手県教育長から文化庁長官あて

同進達

昭和61年1月14日付け 委保第4の868号 文化庁長官から岩手県教育長あて

着工前の発掘調査の指示

昭和61年1月27日付け 教文第592号 岩手県教育長から平泉町教育長あて

同通知

昭和61年1月10日付け 毛越寺から平泉町教育長あて

発掘調査の依頼

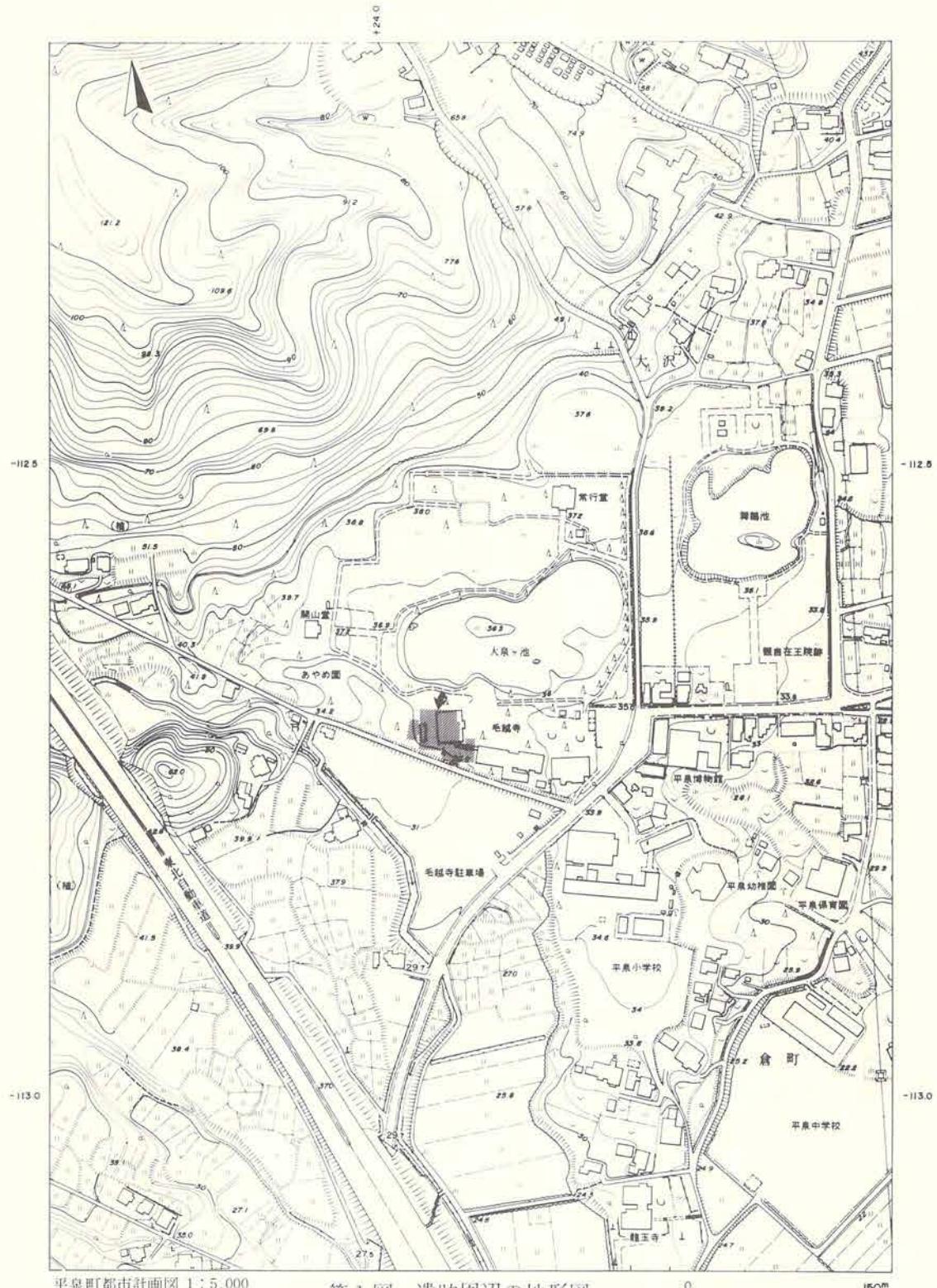
昭和61年1月13日付け 平泉町教育長から岩手県教育長あて

同調査の依頼

昭和61年3月12日付け 教文第683号 岩手県教育長から平泉町教育長あて

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの調査とする旨通知

これにより毛越寺跡の発掘調査は、昭和61・62年の両年度にわたって実施されることとなり、当埋蔵文化財センターは昭和61年3月19日に現地確認を行い、昭和61年4月1日付け契約にもとづき、毛越寺現本堂の西側を対象とした第1次調査に着手することとなった。また、現本堂のある東側については、第2次調査として本堂解体後の翌62年4月1日付け委託契約をうけて実施されたものである。



平泉町都市計画図 1:5,000

第1図 遺跡周辺の地形図

0 150m

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

毛越寺跡は、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の西方 800 m に位置している。国道 4 号からは主要地方道の平泉巖美渓線を 600 m ほど西進し、町道大沢線の起点となる毛越寺駐車場の北側に所在する。

遺跡が所在する平泉町は、県都盛岡市から南に約83km、県南の北上河谷帶南端部に位置している。北は胆沢郡前沢町と衣川村、東は東磐井郡東山町、南は一関市と隣接し、総面積は6,375 km²、人口9,700人余である。

国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「一関」(N J—54—14—15) の図幅に含まれ、北緯38度59分25秒、東経141度6分40秒付近にあたる。また、平面直角座標第 X 系では X = -112,690 m ~ -112,730 m、Y = +24,020 m ~ +24,070 m に位置する。

2. 地形と地質

平泉町の地勢を概観すると、町の中央部を北上川が南流し、東側は北上山地西縁部が北上河谷帶（北上盆地）に接している。北上川は県北の七時雨山（標高1,060m）に源を発し、北上・奥羽両山系を東西に2分し、南北に縦走する全長243kmの大河で宮城県の追波湾に注いでいる。平泉町はほぼ北上川の中流域にあたる。一方の北上山地は宮城県牡鹿半島から青森県八戸市に至る南北240km、東西約77kmの紡錘形に発達した山地である。起伏は乏しく、隆起準平原や残丘状山地が隨所に見られる。図域（第 2 図）の北上山地西縁部は比較的標高が低く、東稻山山地（標高600m 未満）に続く東稻西麓丘陵、駒ヶ峰丘陵から成り、南方に有壁丘陵が形成されている。西側には衣川丘陵が広がっている。

本遺跡は北上川の西側にあり、支流の太田川左岸の低位段丘縁に立地している。遺跡が載る平泉段丘は北上川によって形成された段丘である。範囲はせまく、氾濫平野との比高は 5 m ほどである。崖線は明瞭である。

平泉町および周辺の地質は、北上河谷帶の西側を南北に縦断する盛岡—白河構造線によって東西に分けられる。東側は花崗岩・礫岩・泥岩等で構成される古生層が基盤岩類であり、西側は新第三紀以降の堆積岩および安山岩質岩石が広く分布している。

《引用：参考文献》

安藤今雄・他 (1978) : 『北上山系開発地域土地分類基本調査』一関 岩手県農政部北上開発室

朴沢正耕・他 (1979) : 『岩手県文化財調査報告書第33集』 岩手県教育委員会

狩野敏男・他 (1980) : 『岩手県文化財調査報告書第54集』 岩手県教育委員会

3. 基本層序

調査区全域は数回にわたって盛土が行われており、地点によって層厚に差異が見られる。本堂西側（E～H区）は、昭和30年代に冰室が廃棄された以降に盛土されたもので、極く最近まで継続して整地を行っている。本堂床下は層厚35cm～120cmの褐色～にぶい黄橙色粘土の盛土整地層であり、北側は薄く南側に行くにしたがって厚くなる。本遺跡における基本層序(第4図)は以下のように大別される。

I層 盛土層で地点によって堆積状況に大きな差異がある。褐色～にぶい黄褐色(7.5Y R ¼
・10Y R ½) シルト質土～粘土。層厚は一定していない。

II層 旧地表土である。褐色～暗褐色(10Y R ¾～¾) シルト質土。全体的に堅く締まり、粗砂と水酸化鉄分を多く含んでいる。層厚は5cm～15cmである。

遺構検出面はII層下位であり、出土遺物の多くはI層（盛土層）から出土している。

4. 周辺の遺跡

平泉町内における遺跡は、岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧表によれば89箇所余登録されている。また、近年地域開発や道路網整備に関連しての詳細な分布調査が実施され、遺跡の数は増加する傾向を示している。第3図は昭和58年刊行の「全国遺跡地図」3 岩手県に加除・修正を行い、平泉町を中心とする61遺跡を抜粋して掲載したものである。以下、概略を時期別に述べることとする。

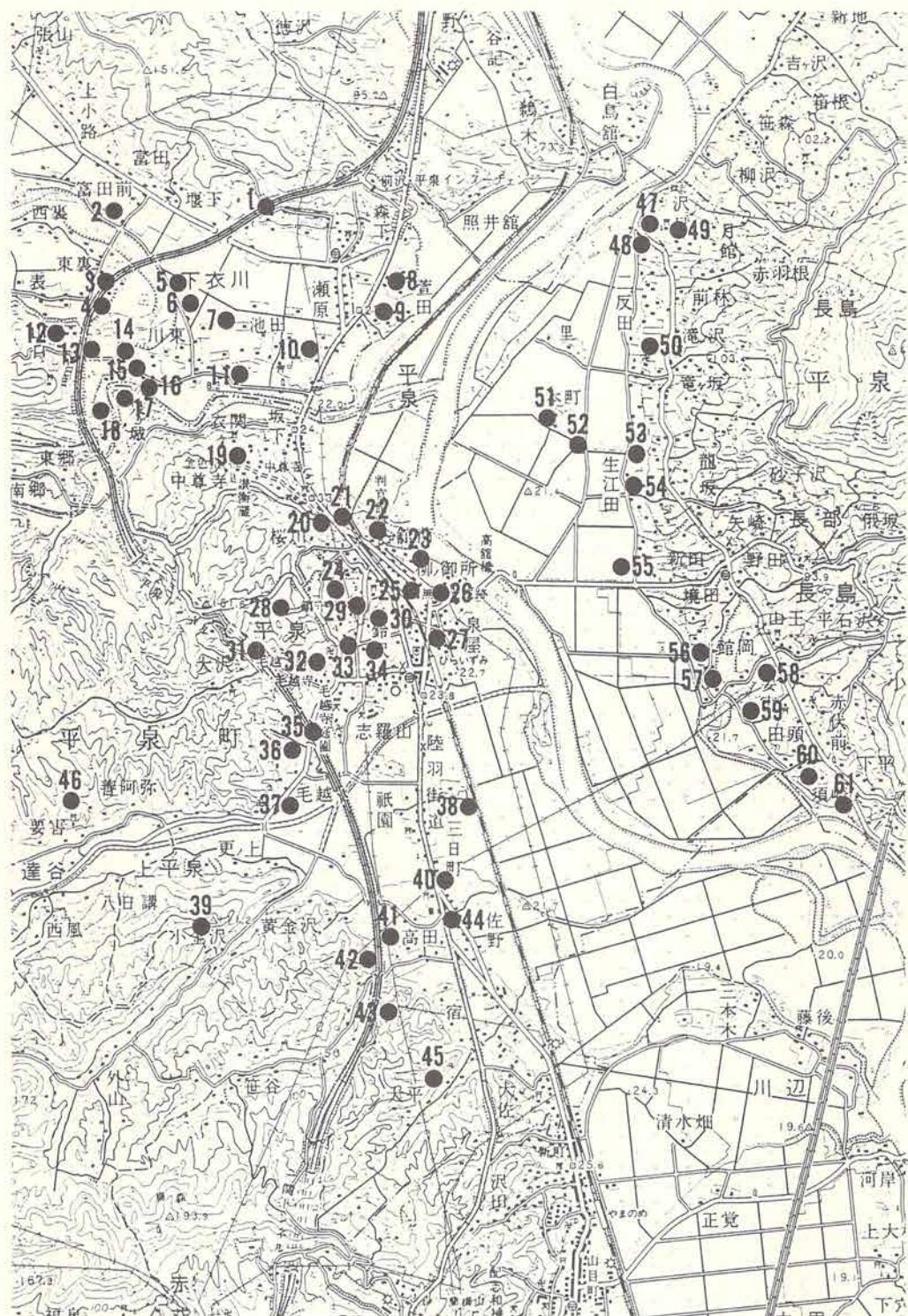
縄文時代の遺跡の多くは中位段丘上に立地しており、中・後・晩期の遺物包含地や散布地で占められている。調査例が少なく詳細は明きらかではない。東裏遺跡③は北上川中流域における数少ない晩期遺物包含層の遺跡で、低位段丘上に立地している。遺物は大洞B式～A式の土器を中心に土偶、石器、土製品が大量に出土している。北館跡④からは県北部を中心とする円筒土器系統の資料が出土している。弥生時代については未詳である。

古代の遺跡は安倍氏や平泉藤原氏関係の遺跡が大半を占め、低位段丘や中位段丘縁辺部に立地している。地域伝承の遺跡も多い、古代末期の山岳寺の中尊寺⑯、藤原清衡・基衡の居館した柳之御所館跡⑰、無量光院跡⑯、毛越寺跡⑯、観自在王院跡⑯の著名な遺跡がある。また、これらを支えた民衆の集落も広い範囲での分布が推定される。

中世の遺跡は城館跡が大部分を占め、段丘崖や段丘縁辺部の要害地に立地している。これらの城館は藤原氏が文治5（1189）年に滅亡したのち、当地方を領有した葛西氏およびその家臣団が支配したものと思われる。城館主や沿革の不詳な部分が多い。



第2図 地形分類図

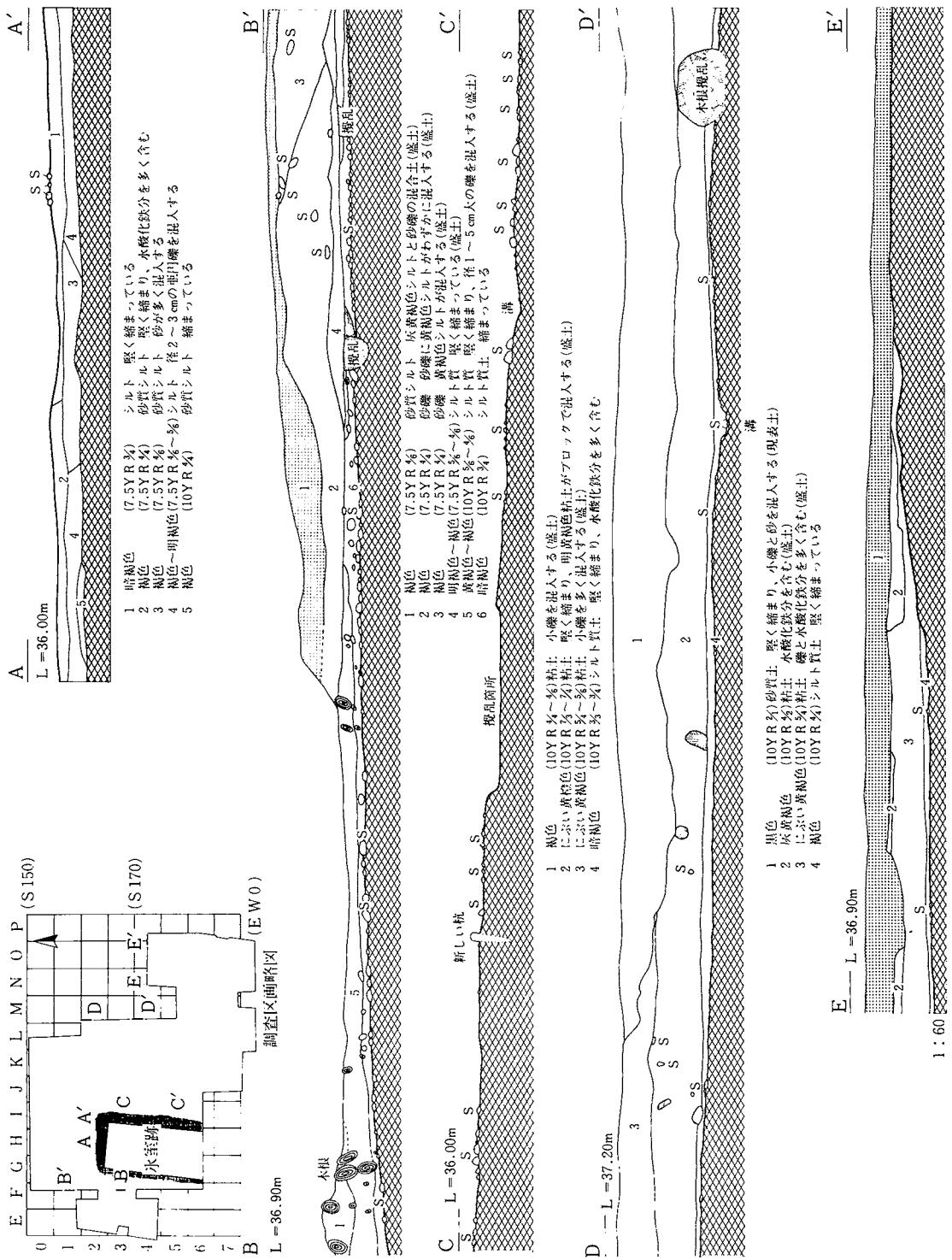


地形図 1:50,000 水沢・一関

第3図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧表

No	遺 跡 名	所在町村	種 別	No	遺 跡 名	所在町村	種 別
1	樹形森陣場跡	衣川村	陣場跡(?)	32	毛 越 寺 跡	平泉町	寺院(特別史跡・特別名勝)
2	向 館 跡	〃	館跡(中・近世)	33	觀自在王院跡	〃	寺院跡(特別史跡)
3	東 裏 遺 跡	〃	散布地(縄文晚期)	34	鈴 沢 瓦 窯 跡	〃	窯跡(特別史跡に含む)
4	北 館 跡	〃	館跡(中・近世)	35	毛 越 I 遺 跡	〃	散布地
5	衣川渡し場跡	〃	渡し場跡	36	毛 越 遺 跡	〃	〃
6	長者ヶ原廃寺跡	〃	寺院跡	37	勅 使 館 跡	〃	館跡(中・近世)
7	宝 ノ 樹 遺 跡	〃	庭園跡	38	高 玉 遺 跡	〃	散布地(土師器)
8	瀬 原 遺 跡	平泉町	散布地(土師器・須恵器)	39	小金沢比丘尼寺院跡	〃	寺院跡
9	伝瀬原柵跡	〃	城柵跡(土師器・弥生土器)	40	三 日 市 遺 跡	〃	散布地(土師器・須恵器)
10	九 輪 堂 跡	衣川村	墓跡	41	片 岡 遺 跡	〃	〃 (土師器)
11	接 待 館 跡	〃	館跡(中・近世)	42	白 帘 神 社 跡	〃	館跡
12	山 口 館 跡	〃	〃	43	新 城 館 跡	〃	〃 (中・近世)
13	大 手 館 跡	〃	〃	44	佐 野 原 遺 跡	〃	散布地(土師器)
14	伝衣川柵跡	〃	城柵跡	45	大 仏 館 跡	〃	館跡(中・近世)
15	並木屋敷跡	〃	館跡(近世)	46	安 土 城 跡	〃	城館跡(中・近世)
16	関 の 明 神 跡	〃	祭祀跡	47	月 館 II 遺 跡	〃	散布地(縄文中期)
17	泉 ケ 城 遺 跡	〃	散布地(土師器・縄文土器)	48	新山権現社遺跡	〃	集落跡
18	伝琵琶柵跡	〃	城柵跡	49	月 館 I 遺 跡	〃	〃
19	中 尊 寺	平泉町	寺院(特別史跡)	50	二 反 田 遺 跡	〃	散布地(縄文土器)
20	伝弁慶の墓	〃	塚	51	本 町 遺 跡	〃	〃 (土師器)
21	衣 関 古 墳	〃	古墳	52	畠 中 遺 跡	〃	〃 (〃)
22	高 館 跡	〃	館跡	53	竜 ケ 坂 遺 跡	〃	〃 (縄文土器)
23	柳之御所館跡	〃	〃	54	新 田 遺 跡	〃	〃 (〃)
24	金 鷄 山 経 跡	〃	経塚跡	55	矢 崎 遺 跡	〃	〃 (土師器)
25	無 量 光 院 跡	〃	寺院跡(特別史跡)	56	館 岡 遺 跡	〃	〃 (縄文土器)
26	伽羅御所II遺跡	〃	散布地(平安時代)	57	西 館 跡	〃	館跡(中・近世)
27	伽羅御所館跡	〃	館跡	58	八 幅 宮 遺 跡	〃	散布地
28	鈴懸の森経塚	〃	経塚	59	小 鳥 古 館 跡	〃	館跡
29	花 館 廃 寺 跡	〃	寺院跡(特別史跡に含む)	60	猪 岡 城 跡	〃	城跡(中・近世)
30	鈴 沢 遺 跡	〃	散布地	61	下 平 遺 跡	〃	散布地(縄文土器)
31	大 沢 遺 跡	〃	〃 (縄文中期)				



第4図 土層断面図

III 調査の経過と方法

1. 調査の経過

毛越寺跡の発掘調査は、昭和61年の第1次調査に引き続いて翌62年に第2次調査を実施した。以下は経過の概略である。

〈第1次調査〉

昭和61年4月8日 当埋蔵文化財センターから調査器材を搬入して現場設営を行う。

4月9日 調査前の全景写真撮影後に寺側と立会のうえ調査範囲の確認と杭打ちを行う。

4月10日 雑物の撤去作業にとりかかり、調査区の8箇所に試掘トレントを入れて遺構検出面までの深さの確認と土層観察を行う。試掘の結果、調査区全域は数回にわたって20cm~80cmの盛土が行われていた。盛土の除去作業は重機(ユンボ)を4月15日から延べ6.5日間使用して行い、4月22日に終了した。

4月24日 粗掘りと平行し順次遺構検出作業を行う。

4月25日 基軸線の測量と冰室跡の平面実測を行う。

5月1日 検出された石敷遺構の平面実測を開始する。

5月30日 石敷遺構のエレベイション記入と器材の整理作業を行う。

5月31日 岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡調査終了確認を受ける。一部埋め戻し作業と石敷遺構全域に保護のためシートを敷設して第1次調査を終了する。

6月2日 器材の搬出を行い現地を撤収する。

〈第2次調査〉

昭和62年4月7日 調査器材を搬入して現場設営を行う。

4月8日 雑物の撤去作業と第2次調査範囲の杭打ちを行う。

4月9日 調査前の全景写真撮影と本堂跡の礎石の平板測量実測を開始する。

4月10日 調査区の本堂跡東側に試掘トレントを数箇所に入れ、遺構検出面までの深さを確認する。試掘の結果、本堂跡全域には35cm~120cmほどの盛土が行われていた。盛土は重機(ユンボ)とダンプカーで除去することとし、4月20日から4月28日までに延べ7日間使用した。

4月28日 粗掘りと並行して石敷遺構の検出作業を開始する。

5月26日 岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡調査終了確認を受ける。

5月27日 石敷遺構の写真測量実測にあたりアジア航測株式会社と協議を行う。

5月28日 石敷遺構土層断面実測と写真撮影を行う。

5月29日 石敷遺構の写真測量実測を開始する。

5月30日 器材の整理作業を行う。

- 5月31日 石敷遺構の写真測量実測を終了する。
- 6月1日 第1・2次調査で検出した石敷遺構全域にシートを敷設し、器材の搬出を行い現地を撤収する。

2. 調査の方法と室内整理

基軸線の設定 毛越寺遺跡内には、埋蔵文化財の基準点が18箇所に設けられている。今回の調査では金堂円隆寺跡（平4-1）を原点とし、南大門跡（平4-2）の中央を通る直線を基軸線とする従前のこと方法によった。各基準点の平面直角座標値（第X系）は次のとおりである。

基準点1（平4-1） X = -11,253,889, Y = +2,408,112

基準点2（平4-2） X = -11,268,230, Y = +2,408,412

調査区画の設定 基線のW80・S150を原点とする5m × 5mの区画を設け、西側から東側にアルファベットのA～Pを、南側に数字の0～7を付した。区画の名称はこれらの組合せによってA0、A1、A2区等と呼称する。なお、平泉町教育委員会が昭和58年に発掘調査した区域の区画名に一部符合させてある。（第5図を参照）

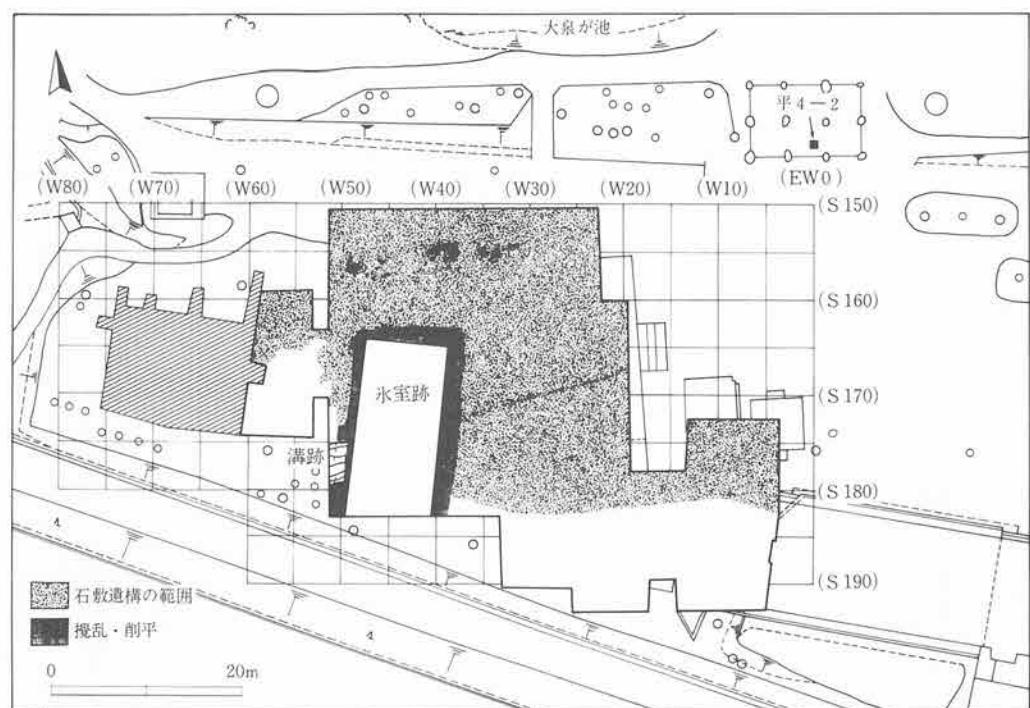
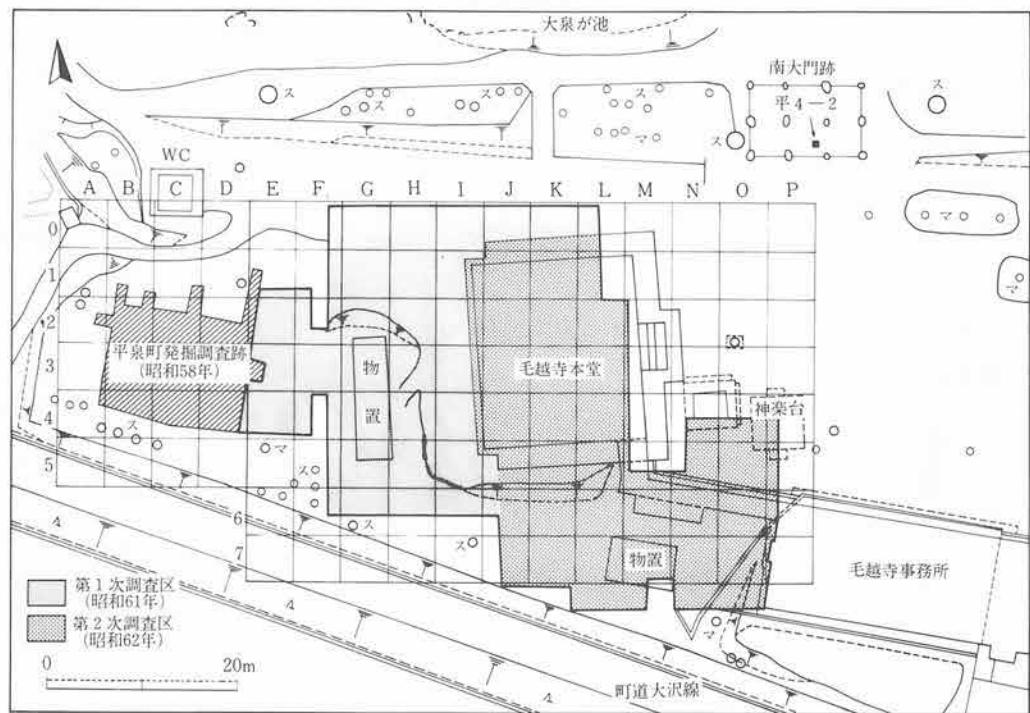
粗掘り・精査 盛土の厚い箇所には重機（ユンボ）で除去し、他は手掘りで粗掘り、遺構検出、精査の順に行った。

実測 第1次調査では、調査員と2名の作業員を補助に加えて行った。第2次調査における石敷遺構の平面実測は、調査期間の短縮をはかるため気球による写真測量実測を導入することとした。

写真撮影 6×7判1台（モノクロ）と35mm判2台（モノクロ・リバーサル）を使用した。

遺物の処理 石器と土器類は水洗、鉄製品は鋸落し後にラベルの記入、接合復元、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作製の順に整理を行った。遺物図版の縮尺は石器2分の1、土器類3分の1、器形の大きなものは6分の1、鉄製品3分の1である。遺物番号は写真図版と符合している。

遺構図面 図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版作製の順に整理を行った。第2次調査の写真測量実測の図面も同様な手順で行った。縮尺は溝跡60分の1、冰室跡平面400分の1・断面80分の1、石敷遺構50分の1、土層断面60分の1である。図版中の石はアルファベットのSで図示している。

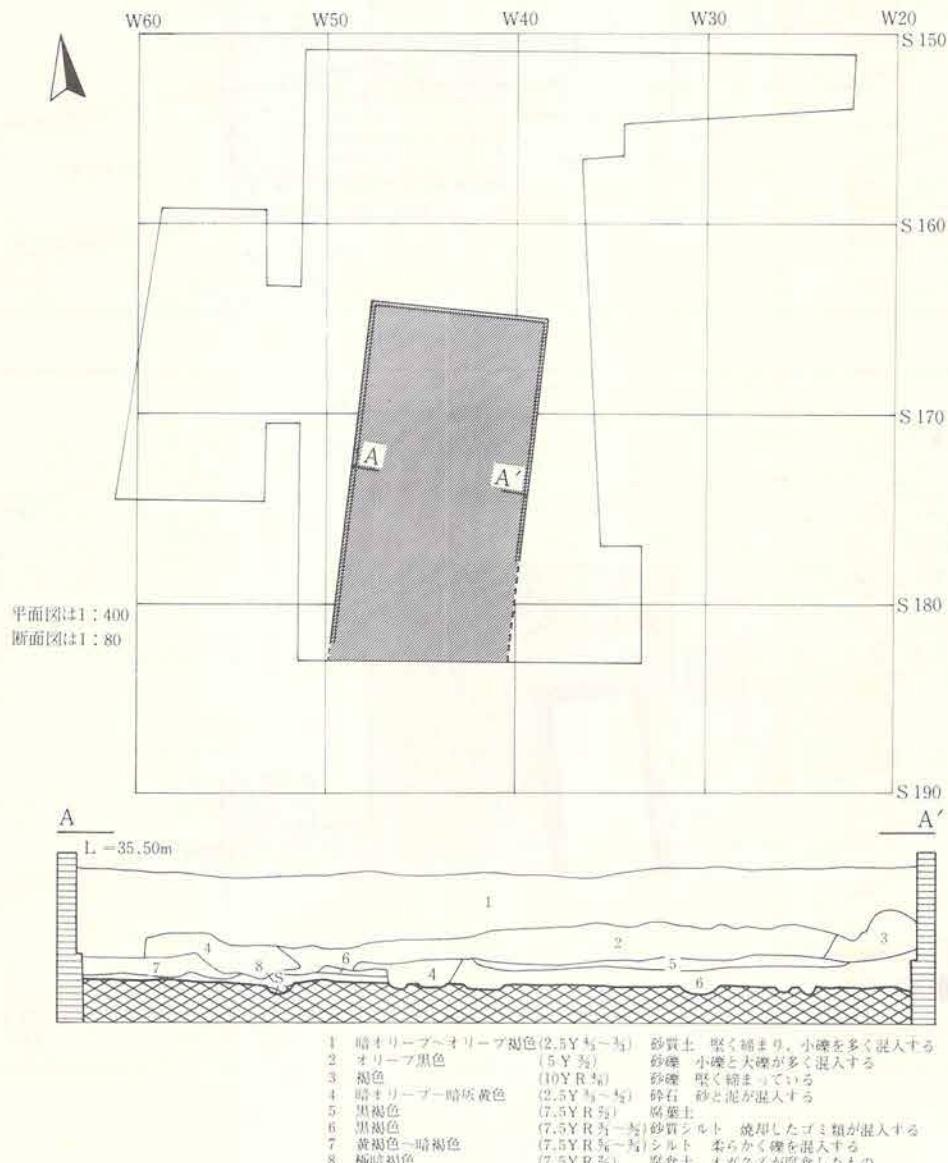


第5図 調査区画と遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1. 氷室跡

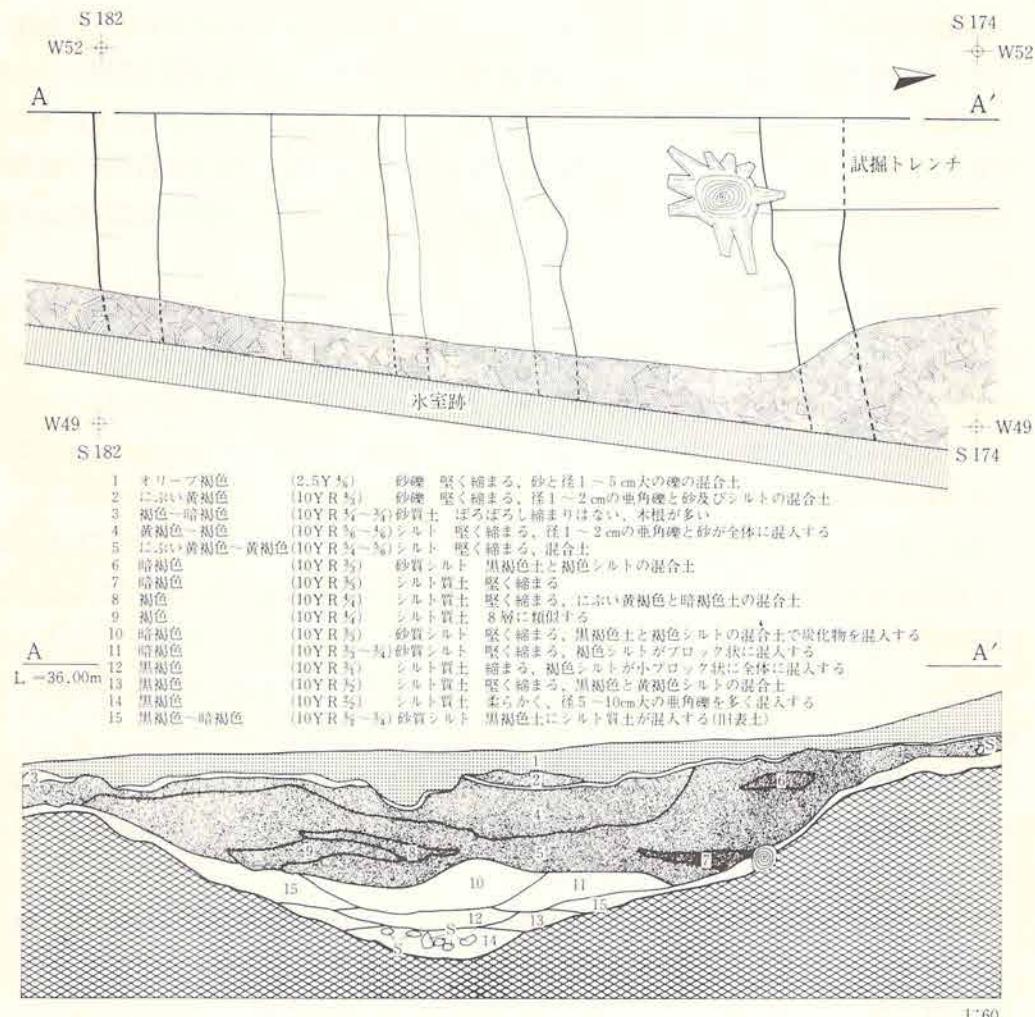
氷室跡（第6図、写真図版6）は、第一次調査において本堂の西側から検出された。昭和30年代前半頃まで嚴寒期に大泉が池の水を切り出し貯蔵したもので、基礎の鉄筋コンクリート柱組のみが現存している。南側の一部は削平擾乱を受けているが、規模は推定南北21.6m×東西9mである。半地下式の構造で底面は粘土質シルトの地山面を掘り下げ平坦にし、幅30cm～40cm・深さ10cmほどの暗渠を縦横に設け、その上面には径10cm大の円礫を敷設している。出入口は調査区南側の町道側に設置されていたようである。



第6図 氷室跡

2. 溝跡

溝跡（第7図、写真図版5）は、第一次調査で水室跡西側の盛土層下位から検出されたものである。東西方向に延びると思われるが東側は水室で削平され、西側は調査区域外に続くために規模の詳細等は不明である。検出部も削平や盛土による擾乱が著しい。規模は上幅6m、下幅0.9m、深さ1.2m前後を測る。底面は比較的平坦で、緩やかな傾斜で立ち上がっている。埋土は15層に大別されるものの、中位から上位は近年の人為的な盛土された擾乱層で占められ、下位は黒褐色と暗褐色のシルト質土で構成され、径5cm~10cmの大の亜角礫を多く含んでいる。構築時期を決定しうるだけの資料はなく、礫の上部から流れ込みと思われる近年の磁器の破片が出土しただけである。



第7図 溝跡

3. 石敷遺構

石敷遺構（第10～19図、写真図版2～4・9～11）は、第5図に示すように調査区南側と本堂西側の氷室跡を除いた全域から検出され、総面積は第1・2次調査合わせて900m²ほどに及んでいる。石敷平面図は基軸線のE W 0・S 150を原点とする、東西20m×南北10mの区画に区切って掲載している。

石敷は南大門跡西側の築垣から南側に緩やかに傾斜する自然地形面上に単層をなして敷設されている。調査区のS 178ライン以南は、攪乱や削平が著しく石は欠落し散在する。石は径1cm～30cm大の川原石（玉石）が使用され、地点によって大きさに差異が見られる。石敷の上部は数回にわたって20cm～120cmの盛土が施されている。遺構検出面は旧表土の暗褐色土を除去した2cm～15cm下位である。

調査区北側のF 0・1～K 0・1区（第10・11図）では、径5cm～10cmの玉石を密に敷設した面と径15cm大のやや扁平な石が集合する部分が数箇所に認められる。石が密な箇所は3m幅で、東西方向に25mほど延びている。また、石敷上部には目潰しの径1cmの小玉石が散布されており、全面堅く締まっている。南側の一部には、径15cm～20cm大の扁平な石が20数個やや規則的に東西方向に並ぶものの、北側に対応する石列は確認されない。東側と西側の比高は60cmを測る。

調査区南側のI 5～K 5区（第16図）では、径10cm～25cm大の扁平な石が80数個ほど東西方向に並んでいる。また、W32.5ライン上を東西の列に直交するよう20数個の石が南北方向に並ぶ、南北石列の東側は径5cm前後の玉石が密に敷設され、一部は円形状に石が欠落している。

調査区東側のN 4・5～O 4・5区（第17図）では、石敷面が西側から緩やかな傾斜で東側に立ち上がって、P 4・5区に至り平坦となる。石は径10cm大のものが多くを占めている。

溝跡は本堂南半部の下位から検出され、L 3～I 4区に亘っている。東側は調査区外に伸び、西側は氷室で削平されているため詳細な規模は不明である。調査区内では長さ19mほどが北東～南西方向に延びている。上幅は30cm～40cmで、西側は東側に比べて多少幅が広くなるようである。深さは10cm前後を測る。一部で欠落しているが壁及び底面は、径2cm～10cm大の玉石を規則的に敷設している。底面は敷石の凸凹があるものの、ほぼ平坦である。

埋土は旧地表土の暗褐色土単層で、下位に水酸化鉄分が多く混入し堅く締まっている。溝は緩やかに南西側に傾斜しており、北東部と南西部での比高は約65cmある。この延長線上にある第一次調査で検出された大溝に続くと思われる。

遺物は石敷上面から土師質土器片6点、陶磁器片2点、石敷の間から鉄製の角釘1点、縄文時代の石器2点が出土している。石器は石敷の一部として敷設されていたものである。個々の詳細は4. 出土遺物の中で一括して記述することとし、ここでは割あいする。

土師質土器の中には灯明皿の破片が含まれており、時期は12世紀に比定されるものである。また、陶磁器や角釘も出土状況からほぼ同時期であろうと思われる。

4. 出土遺物

遺物（第8・9図、写真図版13・14）は旧地表上面および盛土層から石器、土師質土器、陶磁器、鉄釘等が50点出土している。小破片のものが多くを占め、図面を掲載したものは22点である。

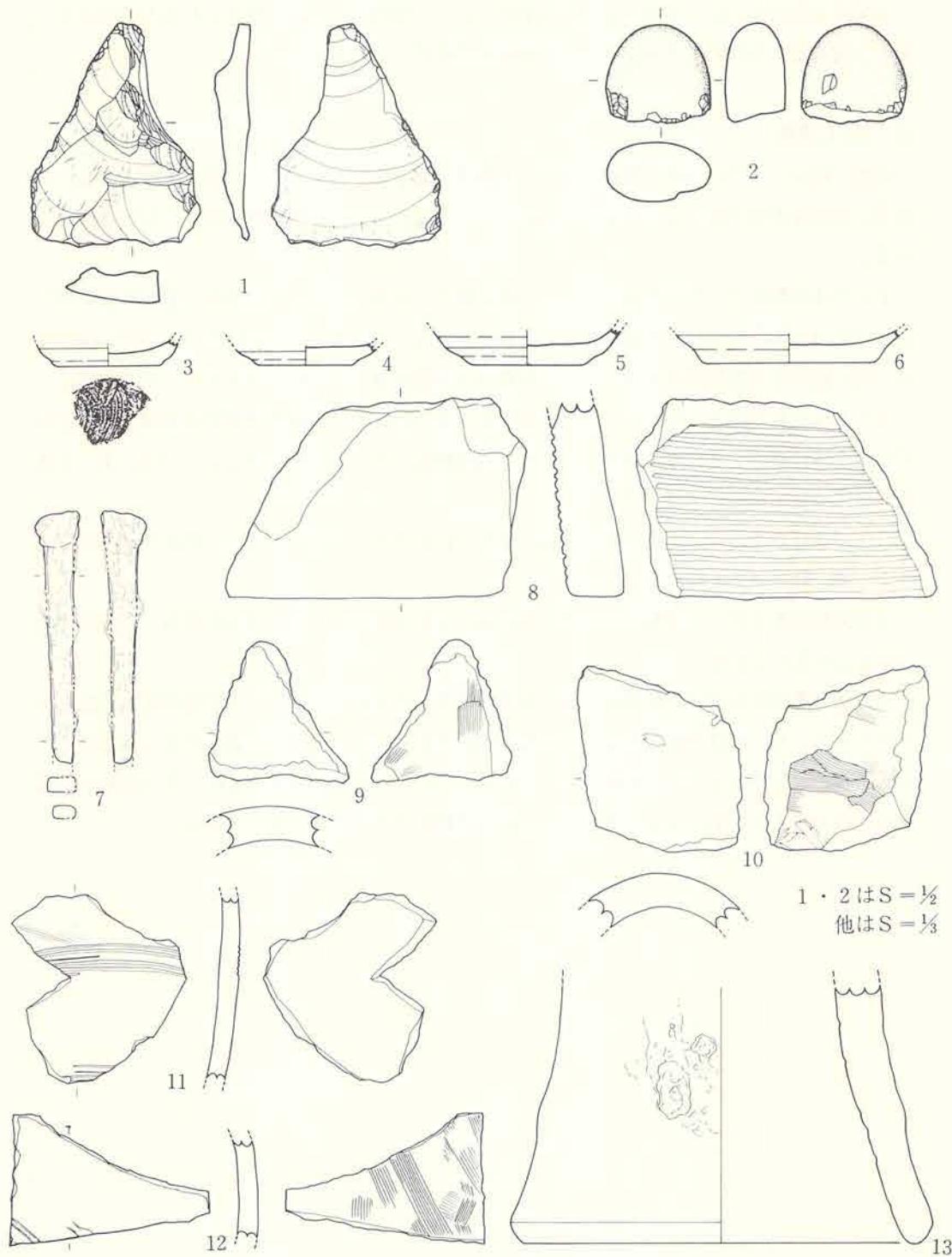
1・2は石敷面の一部に敷設されていた縄文時代の石器である。1は搔器と思われるもので、側縁の片方を両側から粗く刃部調整加工を施している。2は半分ほど欠損するものの、両側縁の一部に細かな調整剝離痕が見られる。石質は1が凝灰質珪質泥岩、2がチャートである。

3～6は石敷上面から出土の土師質土器であるが、破片のため器形の全容は不詳である。いずれも全体は磨滅している。色調は3・6が浅黄橙色、4・5が橙色を呈している。4・5は他の破片の様相から灯明皿と思われる。

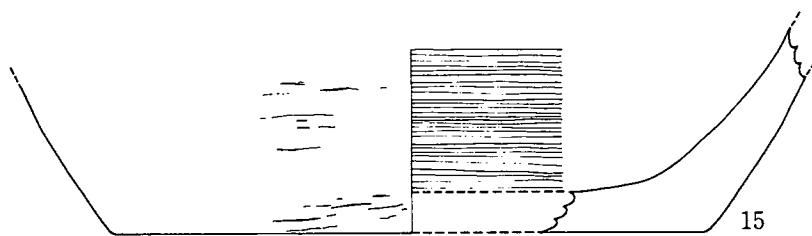
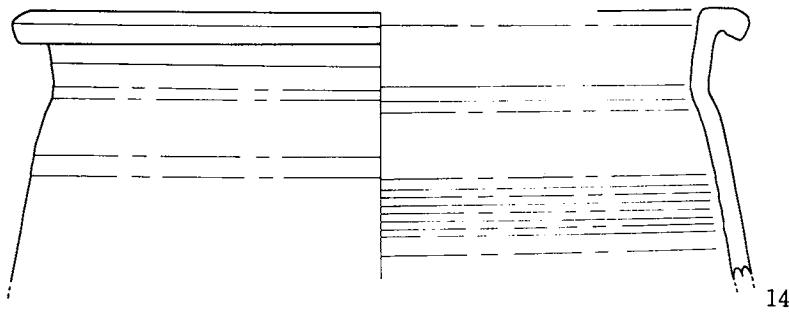
11・17は石敷上面から出土した陶磁器である。11の器形は不詳であるが、並行する4条の沈線文が描かれている。17は小皿であろう。

7は先端部を欠損した鉄製の角釘で、現存長11.7cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。石敷の間から出土したものである。

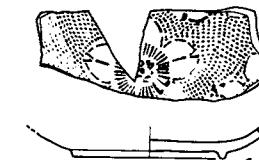
その他の遺物は氷室跡の整地層と盛土層から出土したもので、最近の陶磁器破片が大部分を占めている。9・10は黒褐色を呈した丸瓦の破片である。12は緑色の灰釉がかかった常滑と思われる甕の破片である。13は匣鉢と通称されるもので、陶磁器を焼成する際にその器物を保護するための耐火粘土製の容器である。14・15は比較的大きな水甕の破片である。



第8図 出土遺物(1)

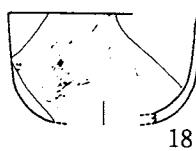


14は $S = \frac{1}{6}$
他は $S = \frac{1}{3}$

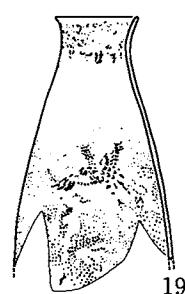


16

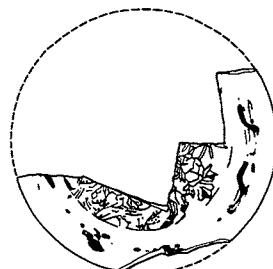
17



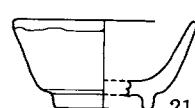
18



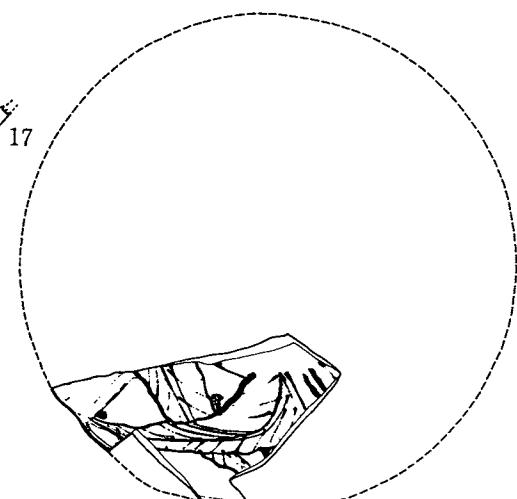
19



20



21



22

第9図 出土遺物(2)

V まとめ

昭和61年・62年度の2次にわたる調査の結果、冰室跡、大溝跡1条、石敷遺構が検出された。遺物は旧表土上面から土師質土器、陶磁器、鉄製の角釘等が少量出土したのみである。大溝跡と石敷遺構を中心に若干の補足を加えまとめとしたい。

大溝跡は調査区の西側から検出されたものの、東側は冰室で削平され、西側が調査区域外に続くために詳細は不明である。東西方向に延びており、上幅6m、深さ1.2mを測る。構築時期を決定する遺物は出土していない。

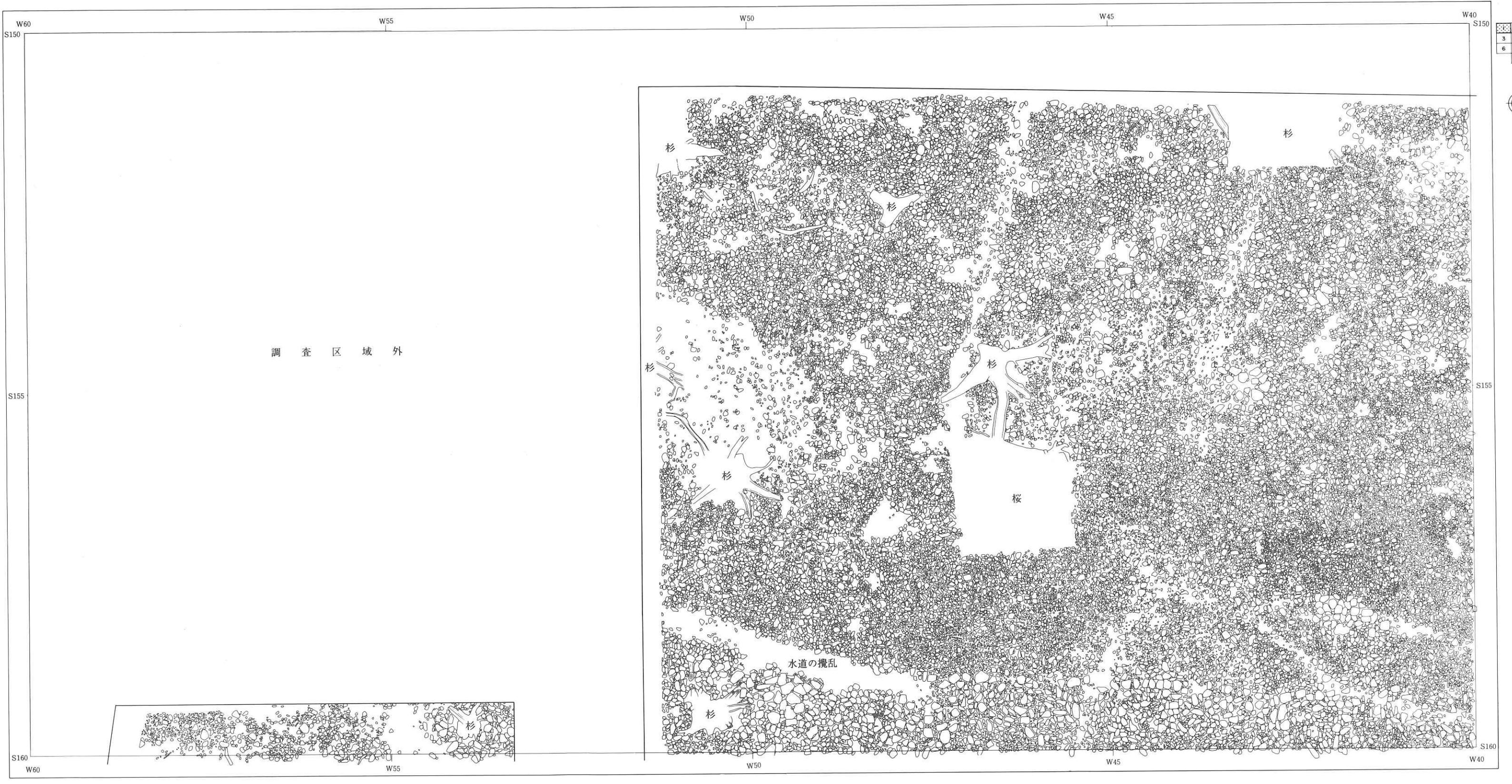
石敷遺構は調査区南側を除いた全面に広がっており、第1・2次調査分の面積は900m²ほどである。使用されている石は径1cm～30cmの大川原石（玉石）で、径5cm～10cm大のものが主体を占めている。石敷は緩やかに傾斜する自然地形面上に単層で敷設されている。調査区北側では、径5cm～10cmほどの石が密に敷設された通路状の部分が東西方向に認められる。幅は3m前後で、石敷上部には径1cm大の小玉石が散布されている。また、調査区の中央部には、北東～南北方向に幅30cm～40cmの浅い溝跡があり、延長線上にある大溝に続くと思われる。径15cm大の扁平な石が集合する部分や東西方向や南北方向に見切り状の箇所も見られる。いずれも性格については明確ではない。

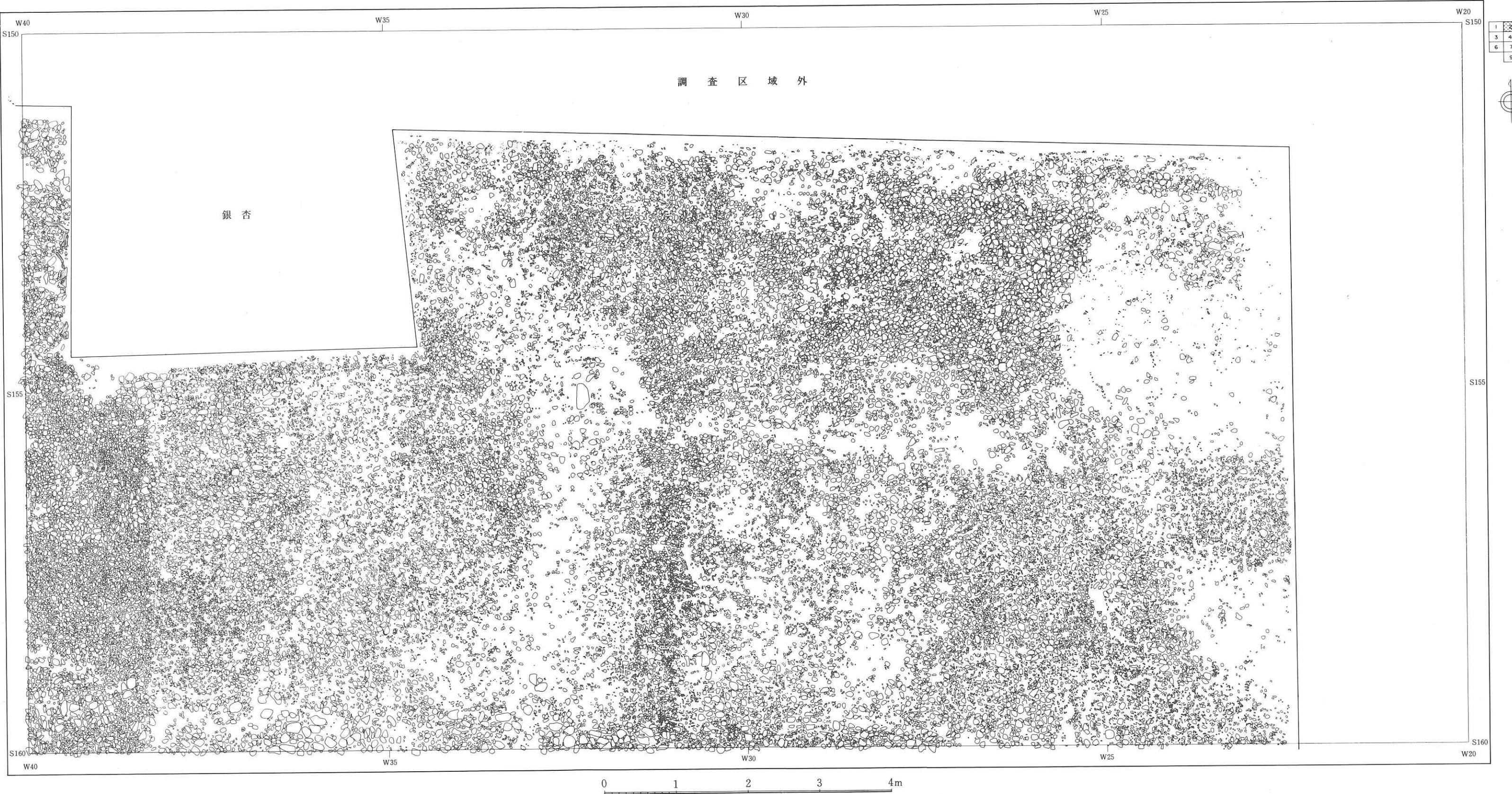
今回調査の石敷遺構は、昭和58年に平泉町教育委員会の調査によって検出された石敷の一連のものであることが明らかになった。また、これらの石敷は南大門跡西側の築垣外側に敷設された石敷の一部と考えられる。

石敷上面から出土の遺物は僅かであるが、時期が12世紀に比定される土師質土器片が出土している。遺物から石敷遺構の時期は12世紀頃と推測されるが、南大門跡や他の毛越寺跡関連遺構との構築時期差等は不詳である。

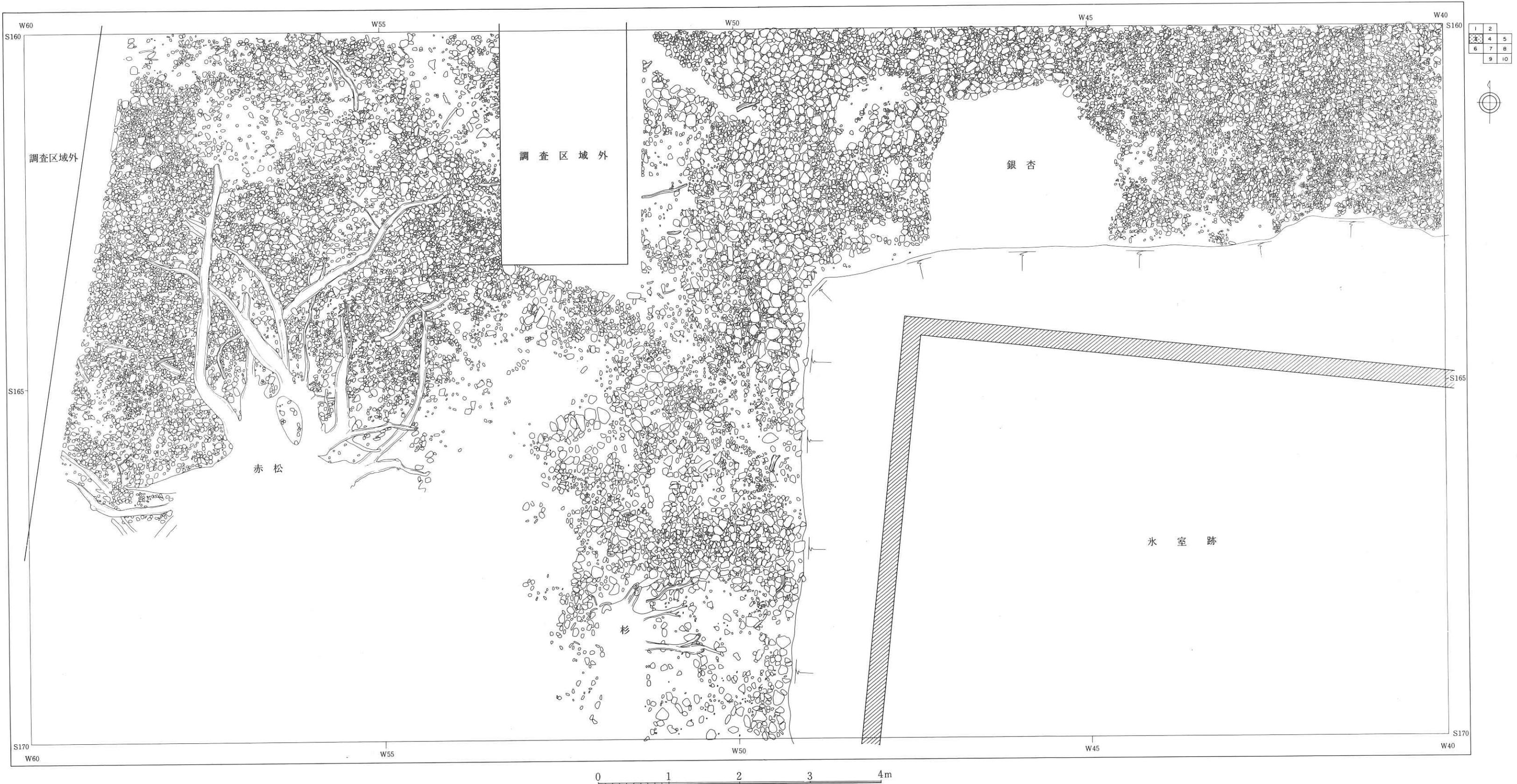
〈参考文献〉

- 藤島亥治郎・他 (1961) : 平泉「毛越寺と観自在王院の研究」 (財)東京大学出版会
本澤慎輔 (1983) : 特別史跡毛越寺跡現本堂裏発掘調査報告 平泉町教育委員会
本澤慎輔・他 (1985) : 毛越寺庭園発掘調査報告書第6次調査 平泉町教育委員会
本澤慎輔・他 (1986) : 毛越寺庭園発掘調査報告書第7次調査 平泉町教育委員会

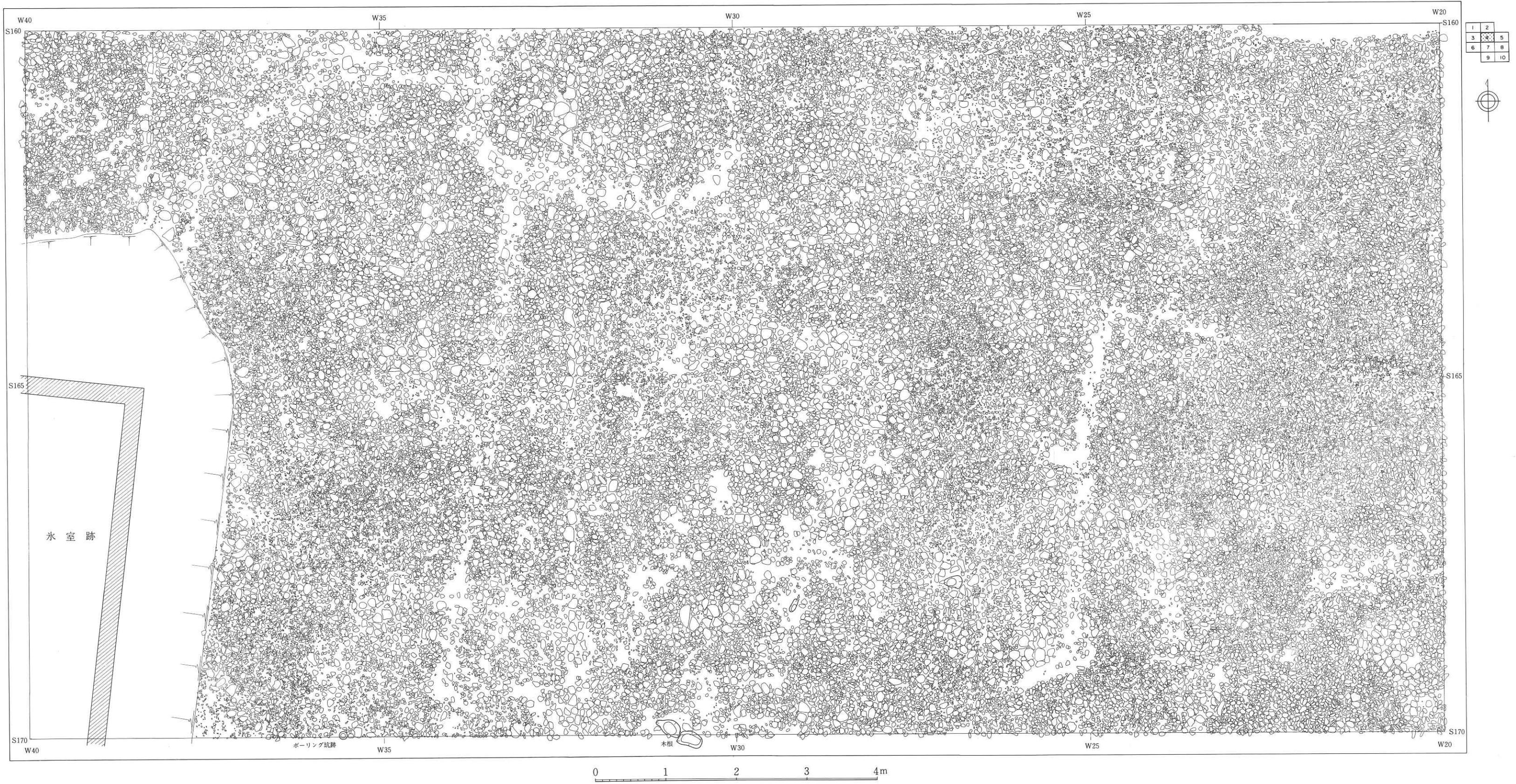




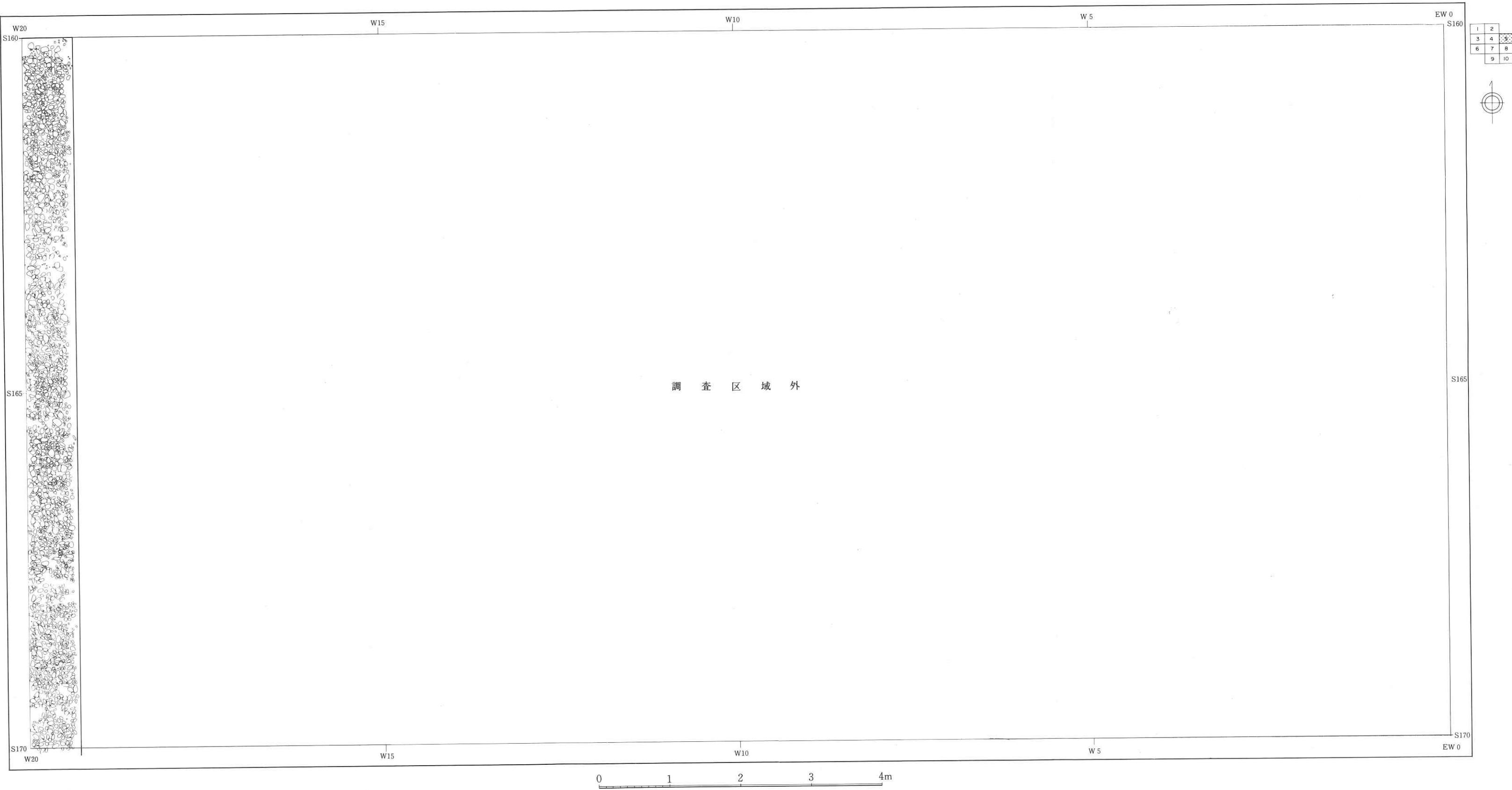
第11図 石敷遺構(2)



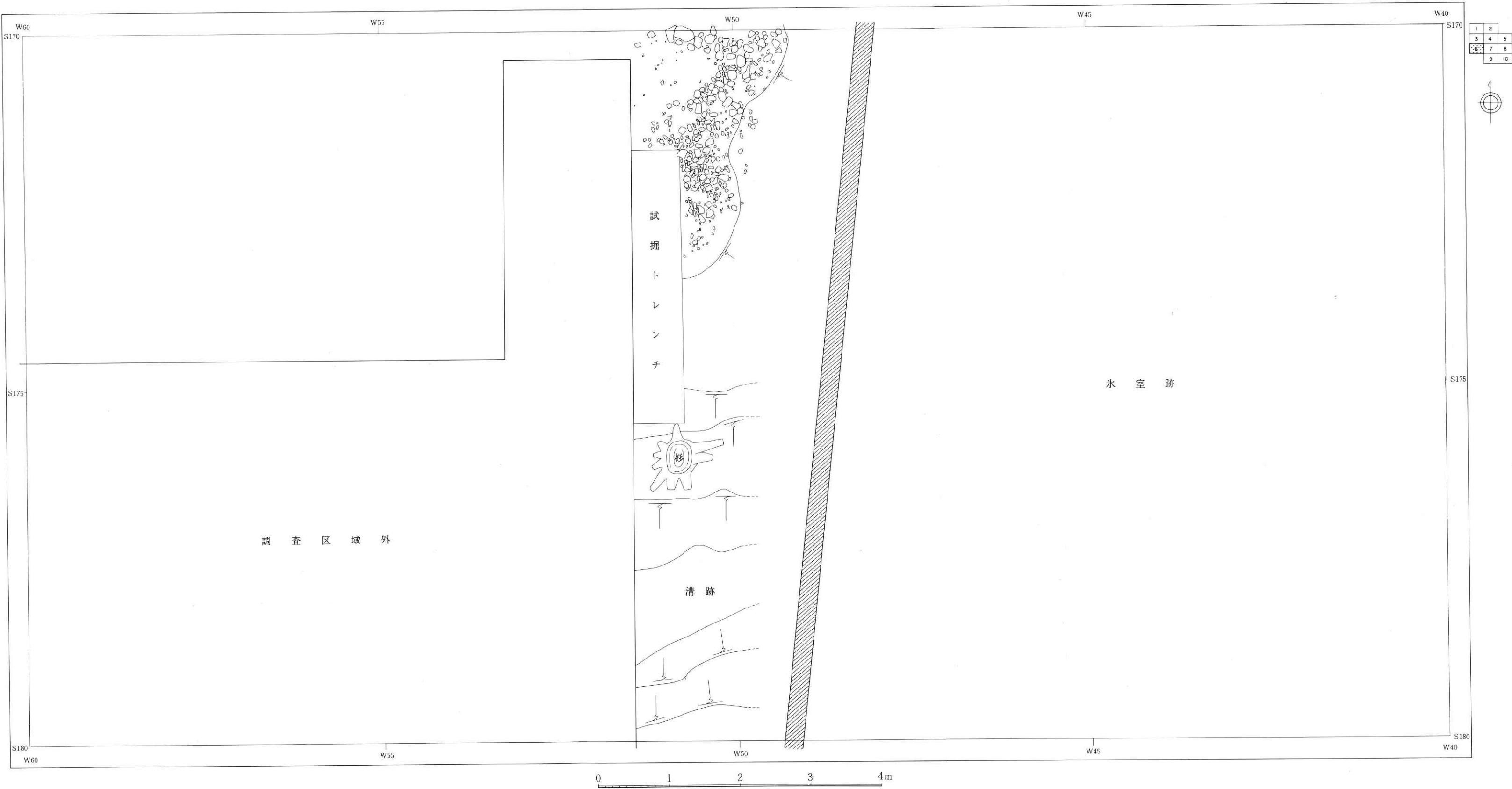
第12図 石敷遺構(3)



第13図 石敷遺構(4)



第14図 石敷遺構(5)



第15図 石敷遺構(6)



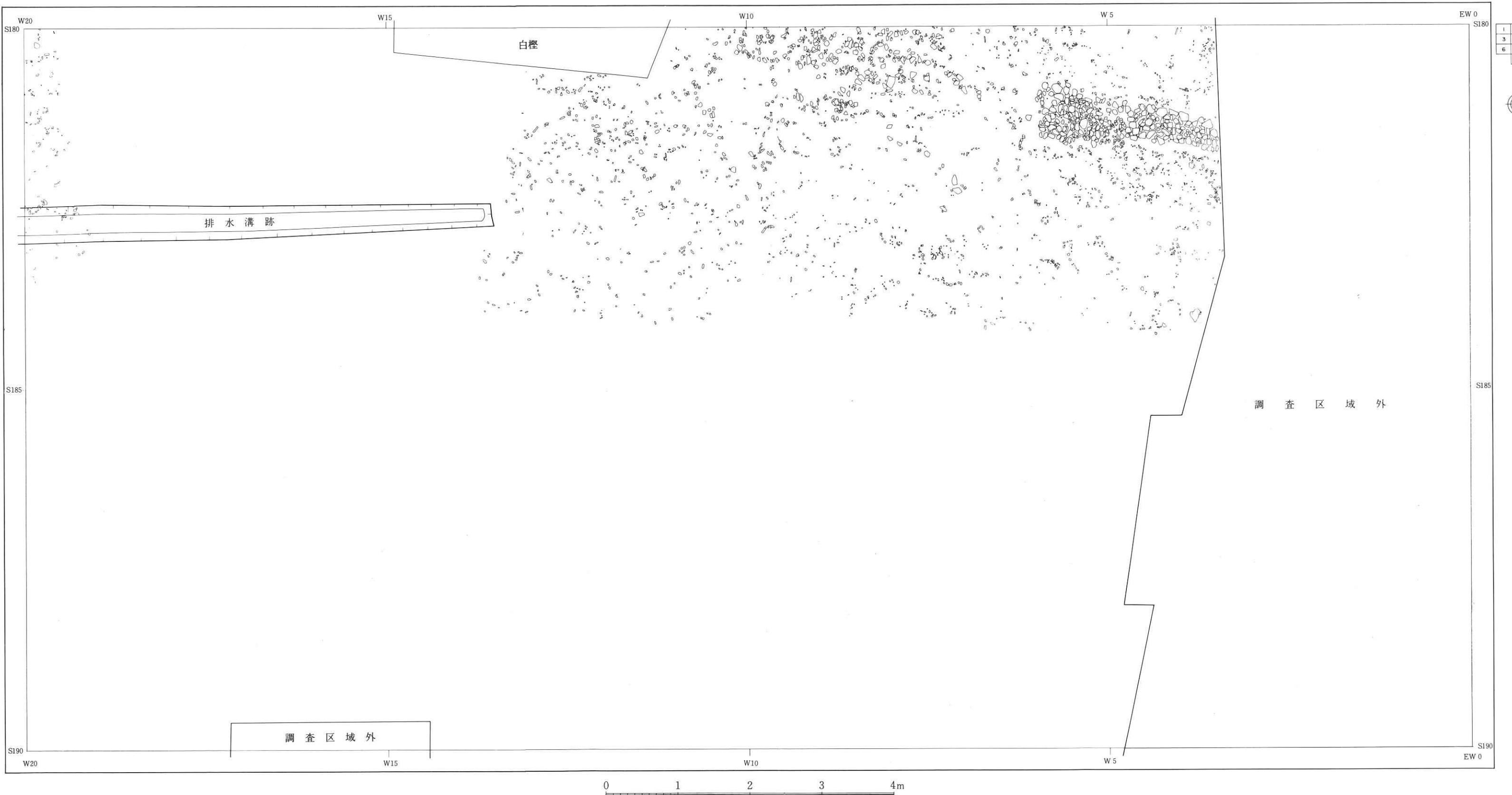
第16図 石敷遺構(7)



第17図 石敷遺構(8)



第18図 石敷遺構(9)



写 真 図 版



a. 北西側から



b. 北側から

写真図版 1 調査前近景(第 1 次調査)



a. 北側から



b. 西側から

写真図版 2 石敷遺構(第1次調査)



a. 南側から



b. 南側から

写真図版 3 石敷遺構(第1次調査)



a. 北西側から



b. 北側から

写真図版4 石敷遺構(第1次調査)

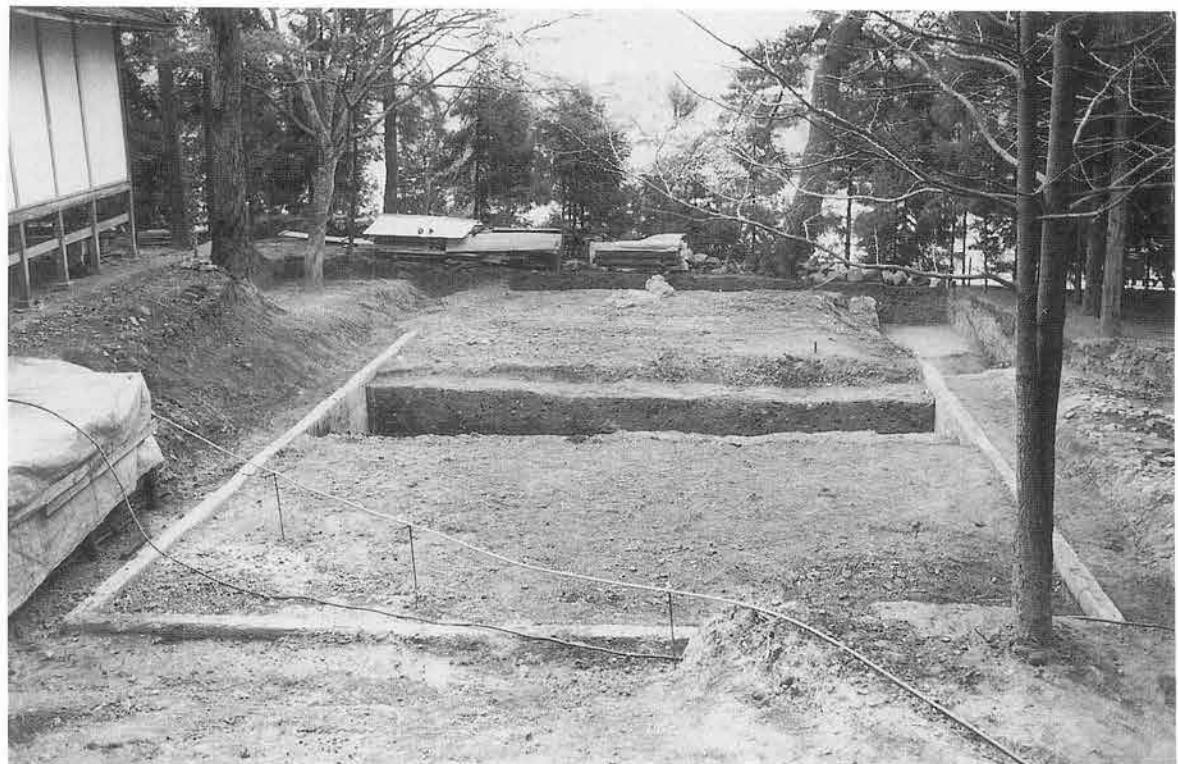


a. 断面(東側から)



b. 完掘(東側から)

写真図版5 溝跡(第1次調査)



a. 北側から



b. 北西側から

写真図版 6 氷室跡(第1次調査)



a. 盛土状況



b. 作業風景

写真図版7 盛土状況・作業風景



a. 旧本堂跡西側から



b. 旧本堂跡東側から

写真図版 8 調査前近景(第2次調査)



a. 西側から



b. 西側から

写真図版 9 石敷遺構(第 2 次調査)

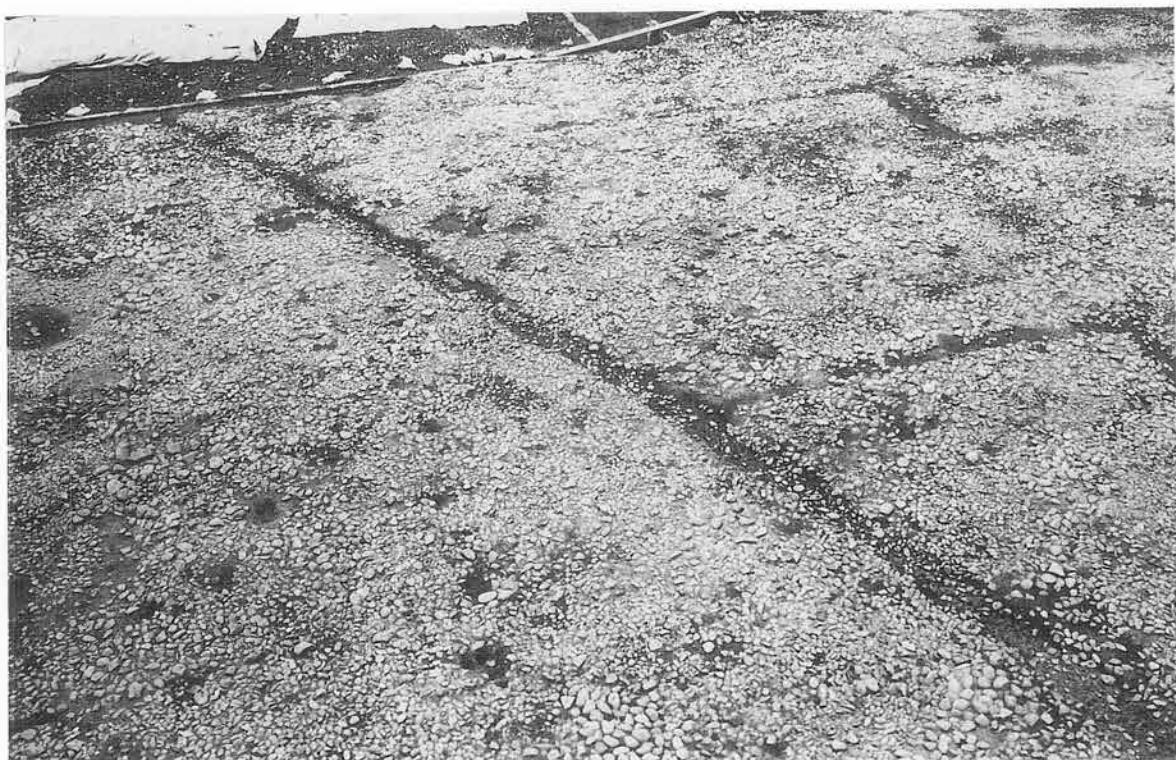


a. 南側から

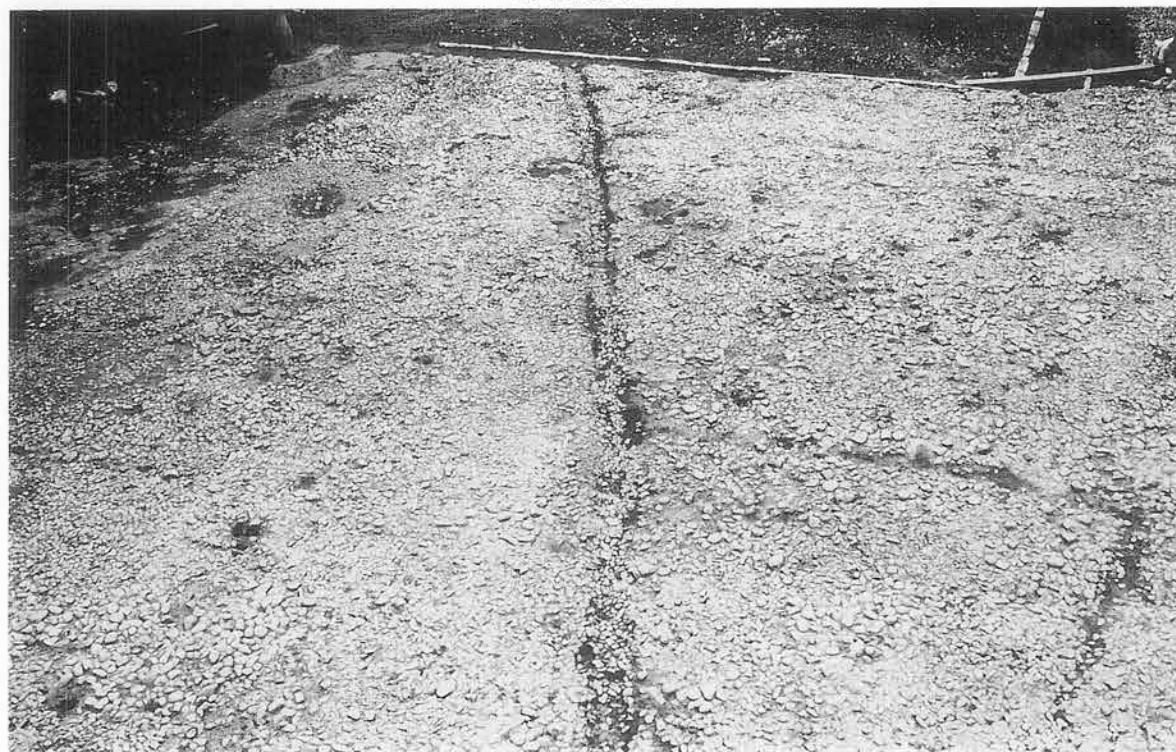


b. 南側から

写真図版10 石敷遺構(第2次調査)



a. 南東側から



b. 東側から

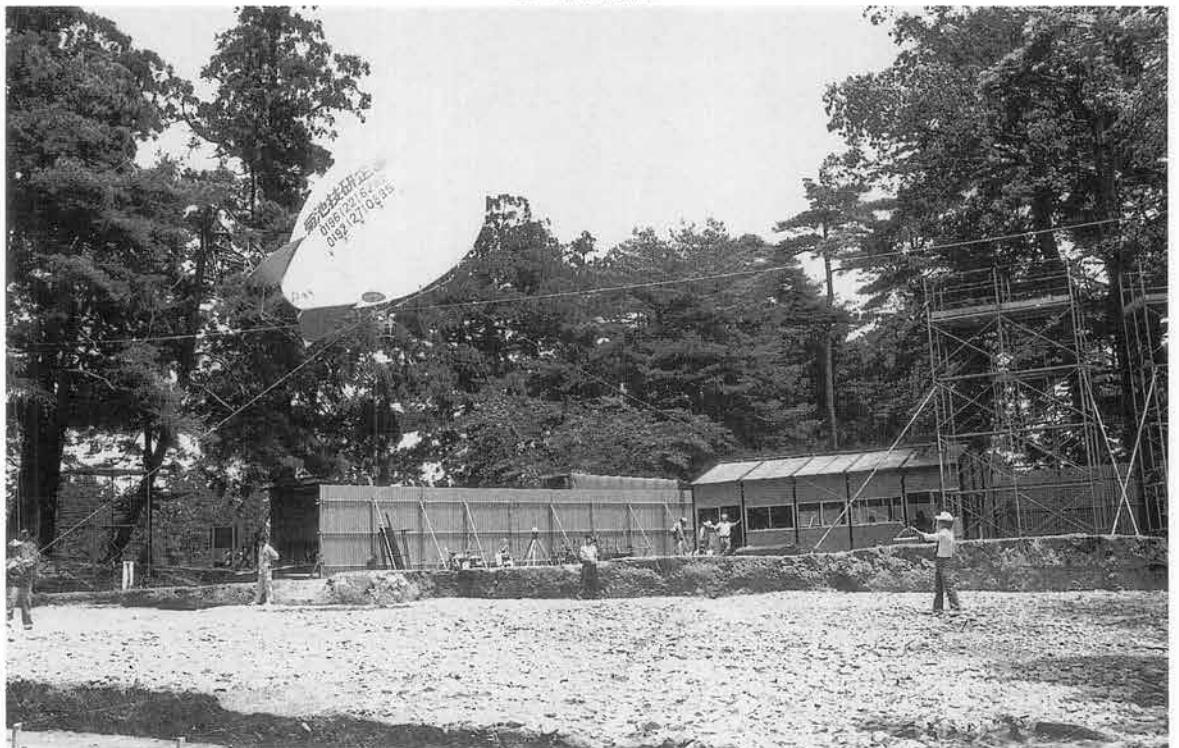
写真図版11 石敷遺構(第2次調査)



a. 土層断面

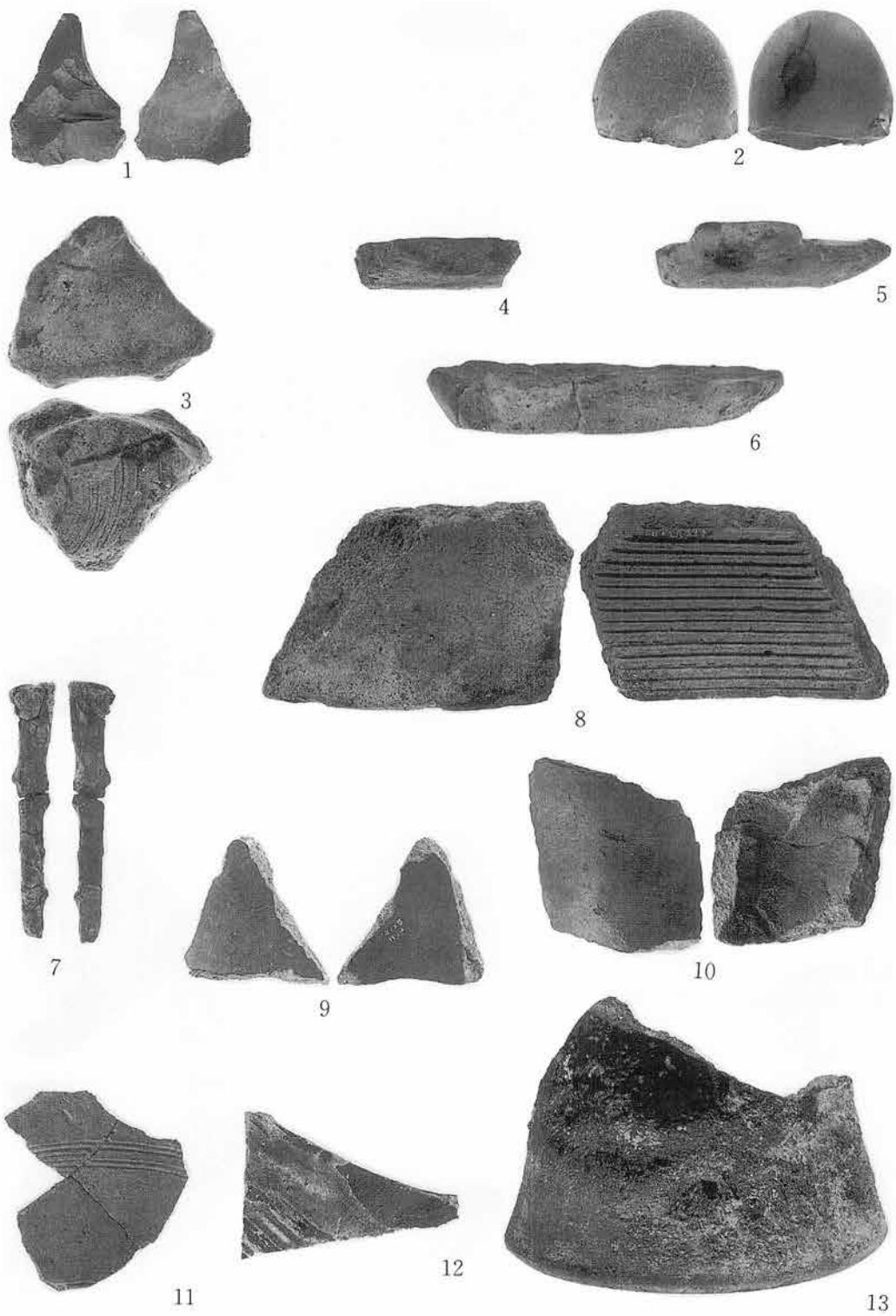


b. 土層断面

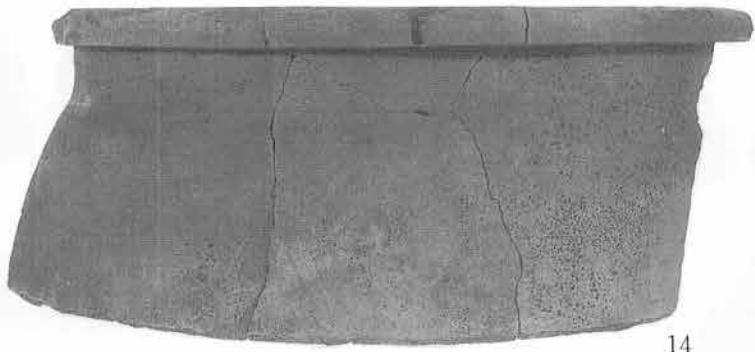


c. 写真測量

写真図版12 土層断面・写真測量風景(第2次調査)



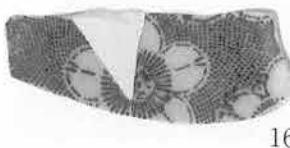
写真図版13 出土遺物(1)



14



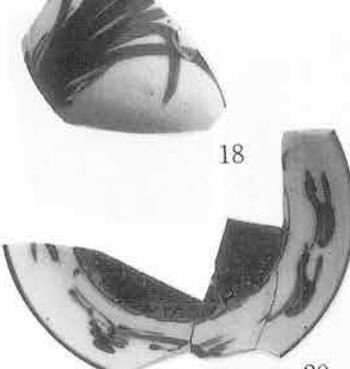
15



16



17



18



19



20



21



22

写真図版14 出土遺物(2)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 及川 昌二
副所長 鎌田 良悦

[管 理 課]

課長 鎌田 良悦
課長補佐 伊藤 吉郎
主事 阿部 隆広
嘱託 似内 喜兵
運転技士兼技能員 佐藤 春男

[調査課]

課長 昆野 靖
主任文化財専門調査員 三浦 謙一
〃 工藤 利幸
〃 高橋 与右エ門
〃 田鎖 寿夫
〃 佐々木 嘉直
〃 平井 達
〃 中村 良一
〃 中川 重紀
文化財専門調査員 光井 文行
〃 佐瀬 隆
〃 玉川 英喜
〃 斎藤 博司
〃 東海林 隆幹
〃 遠藤 修
〃 斎藤 邦雄
〃 高橋 義介
〃 酒井 宗孝

[資 料 課]

課長 新田 和雄
主任文化財専門調査員 小田野 哲憲

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第127集

毛越寺跡発掘調査報告書
毛越寺本堂改築工事関連発掘調査

印刷 昭和63年 5月25日

発行 昭和63年 5月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323